

『徳島地域文化研究』創刊にあたって

近藤直也

四国は民俗の宝庫である。これは意外と知られていない事実である。中でも、徳島県下の民俗は、筆者の三〇年近い四国の民俗調査研究過程における関係論文の渉獵にあたって、該当する事柄について本格的に論じられた論文を読んだ経験は少なかった。これほどまでに、県下の民俗資料はその豊かさにもかかわらず、その価値が正当評価されてこなかったのである。

筆者の未熟な民俗調査研究経験の中でも、聴き取り調査を重ねる中で、数多くの極めて興味深い事例に幾度となく遭遇することがあった。ただ、残念な事に、当時の研究テーマの中心とずれていたため、学術的に重要な伝承とは思いつながら、優先順位をつけてしまい、ついつい後回しになって、どこかに置き去りにしてしまうことが何度もあった。個人の力量では、これら全ての重要な民俗事象を取り上げて、一つ一つ詳細に検討を加え、じっくりと論を展開するにはどうしても限界がある。研究領域が深化すればするほど、必然的に問題意識を狭い枠の中に追い込まざるを得ず、徒に三〇年の歳月が過ぎてしまった。あの時、なぜ真剣に調査して記録に残しておかなかったのだろうか、後から悔しい思いをする事が何度もあった。今

振り返ると、個人の小ささを否応無く思い知らされる次第である。こんな時、志を同じくする研究仲間が近くに居て、共に議論を交わすことができれば、どれだけ「徳島地域文化」を学問的に発展させることができただろうと何度も痛感させられるものであった。

一口に三〇年と言っても、一世代であり、筆者が民俗調査を始めた学生時代と現代とは人々の物の考え方や価値観などは大きく様変わりしてきた。三〇年前まではごく当たり前のように行われていた民俗が、今は跡形も無く消え去ってしまったと言う現実と度々遭遇させられた。当然、その頃行事は既に消え、辛うじて伝承だけ残されていた場合などは、今でも開けることを期待する事自体が無いものねだりとなる。学生時代は、「今のうちに調査して記録に残しておかねば」と言う使命感に駆られて各地を探訪して歩いたが、その思いは今も変わっていない。否、年を重ねてしまった現在こそ益々強くなっている。

このような状況下であり、今般、筆者の呼びかけに応じ、志を同じくする仲間達が一堂に会し、「徳島地域文化研究会」なるものを立ち上げ、機関誌『徳島地域文化研究』を上梓する運びとなったことは、極めて喜ばしい

限りである。ここに結集した同志らは、いずれ劣らぬ一騎当千の論客ばかりであり、民俗文化研究に対する情熱だけは誰にも引けを取らない。最初は少人数でも、我々の情熱により、今後老若男女数多くの賛同者を得て、徳島の地域文化の発展に少しでも寄与できればこれに勝る喜びは無い。

「地方の時代」と言われて久しいが、町おこし・村おこしの成否の鍵は、ひとえに自らの置かれている現状をどれだけ正確に把握できているか否かにかかっている。この事は、かつてふるさと創成基金として全国の多くの自治体にばら撒かれた一億円が、その後どうなったかが見事に証明している。十分な計画も立てず、ただなんとなくムードに流されて、中央の文化を無理にねじ込んでみても失敗することは目に見えている。「急がば回れ」の諺の如く、現在の我々に最も大切なことは、自らが置かれている地域の文化状況を正確に把握することにある。先代、先々代、更にそのずっと前から伝えられてきた有形・無形の文化財をどんどん発掘し、先祖らの物の考え方や世界観・宇宙論を明確にするところから始めなければ、これからの進むべき方向性など見えてこないのである。「地域文化」とは、まさにこの作業を通じてのみ見えてくるものであり、これこそが最も大切な自らのアイデンティティーの確立に直結するのである。この段階で、「徳島地域文化研究会」の持つ役割がいかに重要なものであるかがよく理解できよう。

時代はまさに、日本では戦後の高度経済成長期を経てバブルがはじけ、地球規模では環境問題などにより、従来の価値観がすでに機能しなくなつて来つつある。今ほど、ヒトとして如何に生きるべきかを真剣に問いかけられている時は無い。こんな中で、先人達が気の遠くなるような長い歳月と労力を費やして練り上げた、汲めども尽きぬ豊かな生きるための知恵や、再生可能な自然と共生し得る生産技術、さらには彼らの生き方の再評価こそが、今最も求められている事柄である。以上の意味で、「徳島地域文化研

究会」は今という時代に生まれるべくして生まれたのであり、一つの大きな必然性があつたと言える。

単なる「徳島主義」「阿波主義」と言つた郷土主義に陥るのではなく、日本全体の文化さらには全世界の人類文化を踏まえた上で、「徳島地域文化」の在りようを模索する視点に立つことによって、初めて生きた学問になり得ることを信じている。今後、末永く後の世代の人々にこの志が継承され、以つて本当の意味で大地に深く根ざした徳島の地域文化が益々発展することを切に願うものである。

(千八二〇—八五〇二 福岡県飯塚市川津六八〇—四

九州工業大学情報工学部)